

## 第一回指示書

今日 2014年 4月 23日、第 44代アメリカ合衆国大統領が来日。  
私達の仕事はじめにはうってつけの日だ。

さあ、はじめよう。

白い画布の中に足を踏み入れよう。

画家はその四角い世界の中を彷徨う旅人である。

絵画とは旅人の残した痕跡である。

キャンバスは縦長に置かれる。画面上方に微かに水平線を引いてみる。その水平線からさざ波が静かに手前に押し寄せてくる。それは朝の海だ、まだ画布は穢れを知らぬ。淡く、薄く、繊細に、まるで画布に色を置くことがどこか恥ずかしい行為であるかのように筆を運ぼう。画面下方は渚であるが、今はまだ空白のまま残しておこう。

そう、渚である。私たちの住むこの島国は四方を海に囲まれ、国土は常に波に洗われている。何処へ向かっても私たちの旅は渚で行き止まる。私たちの絵画もまたここを舞台に始まりここで終わるのであろう。海岸を描く時にキャンバスは通常横長に置かれるが、私たちは通常性からは逸脱しよう。

旅を始める。私たちの伴侶は一頭の馬である。画面下方の砂浜にあたる場所はまだ空白なまま残されているだろうか。そこに伴侶の馬を佇ませてほしい。逆光の中に佇んであなたを探している。あなたの伴侶だ、毛色はあなたのお気に召すままに。あなたは伴侶の首に花飾りを掛けるだろうか。伴侶の足もとには餌となる草が生えているだろうか。波頭には柔らかな陽光がきらめいているだろうか。この幸福感に満ちた画面の中であなたは一つの暴力をはたらく。あなたは伴侶である馬を塗りつぶさなくてはならない。やさしい手つきで。やさしい色彩で。ルノアールのように。

これが今回の絵画の原罪である。「日本人が理解する唯一の言葉というのは、私たちが日本人に対して原爆投下することのように思います。獣と接するときは、それを獣として扱わねばなりません」

これはアメリカ国内の原爆投下への抗議に対するトルーマン大統領の公式回答だ。さらに、ミズーリ号上でマッカーサーは「日本人の精神年齢は十二歳」「精神の再復興と性格改善が行われなければならない。まずは精神から始めなければならない」という声明を出す。(参考文献「日本が二度と立ち上がれないようにアメリカが占領期に行ったこと」高橋史朗)

こうしていびつな改造人間の私たちが誕生した。

## 第二回指示書

今日は占領軍によって永久に日本をアメリカの奴隷に留めるために制定された憲法記念日だ。いまや僕らの奴隷根性は脳髓の奥まで染み渡っていて奴隷であることに誰も疑問を覚えない。奴隷天国だ。絵画日和だ。始めよう。

古来、この島国では海の彼方に理想郷と浄土があるとされてきた。だが、私たちの期待はいつだって裏切られる。海の向こうからやって来るものは有難いものばかりとは限らない。黒い船であったり爆弾を積んだ飛行機であったり、時には高すぎる波もやって来る。それでも私たちは待ち続ける。さあ今日も私たちの絵画は渚から始まる。画面の上方にまだ水平線はあるだろうか。今日もそこから穏やかな波が静かに渚に寄せてくる。波はまるで意思をもった生き物の様だ。確固たる意思をもったものだけが海の向こうからやって来て、私たちの寄るべのない足下を洗い続ける。それにひきかえ私たちの描く絵画からはいつだって根拠が失われている。根拠がないから村上隆氏のように戦略を立ててやらなきゃならなくなる。だが作られる必要もないのに作られる美術って何なのだ。しかし、このゴーストペインターなどという悪あがきもまた根拠なき芸術家の戯れなのだ。だがやはり探し当てたいのだ、私たちの水脈を。これは戦略なんかじゃない。その為にこの寄るべのない渚の砂の上に私たちはしっかりと根をおろさなければならない。

続けよう。

波を割って一艘の船が近づいてくる。その船はやはり黒いだろうか。マシュー・ペリーはメキシコ侵攻の功績により日本侵攻を命じられメキシコに向けたのと同じ船で僕らの前に現れる。あなたは決めなければならない。その船を受け入れるか、追い払うか。追い払うのならあなたはその船を塗りつぶさなければならない、黒以外の色彩で。セザンヌがリンゴを塗り残す様な感じで。受け入れるのならその船はあなたの絵画の重要な一部として常にそこにあり続けるだろう。

そこに近づく小舟が一艘。一匹のタヌキが乗っている。カチカチ山のタヌキである。なのでそれは泥舟である。やがて泥舟は沈むであろう。タヌキはもちろん近代日本の姿そのものである。戦後僕らはタヌキである自らの姿に自己嫌悪を覚えるように徹底して教育された。だからあなたは水の入ったスプレーで今あなたの描いた泥舟に噴射し、洗い流すだろう。これが二度目に犯すこの絵画の罪だ。

何事もなかったかのように空と海のあいだから再び穏やかに、印象派のように穏やかに波は押し寄せ私たちの岸辺を洗う。だがその波は本当に穏やかなのだろうか。その穏やかさの向こうにドラクロアやクールベの海を幻視しながら筆を置く。

### 第三回指示書

東北の農村が困窮すると歴史は動く。82年前の今日 5月 15日、農本主義者の橘孝三郎は東京の変電所を襲撃し、首都を暗闇にした。東北震災後の私たちはみな節電を口にしたが、首都のほの暗い夜は長くは続かない。みな責任は誰かに押しつけながら元の生活に戻っていった。

この10数年、あまりにも簡単に絵画は生まれ続けてきたように思う。だから震災を期にアーティストは慌てた。アートに何ができるか？いま絵画は可能か？そして何もできず無力感に囚われると今度は体制批判へと矛先を変えた。アーティストは世の役に立つ存在であろうとして必死であった。そんなアーティストたちを尻目に佐村なんとかは確かに被災地の人々の魂を癒していたのである。

私たちの絵画はそんなところは目指さない。何かの役にもたたなければ誰かを癒しもしない。もちろん啓蒙なんでもってのほかだ。ただ人類最初の絵画が持っていたであろう力、せめてそれを思い出したい。思い出だけの想像力を取り戻したい。絵画と自然との蜜月をなんとか遠目にでも眺めやり、ああ、思えば遠く来たもんだ、と最後に嘆息つけば上々だ。

私たちはなぜ絵を描くのか。それを思い出するために絵を描くのだ。

さあ、描こう。

今日もまた水平線から波が画面下方におりてきて渚で砕ける。それはいつものように穏やかではない。ゴッホの麦畑のような粘着質のうねりをともなっている。人の想念を物質化してしまうソラリスの海のように。そうだ、絵画とはソラリスの海だ。

そんなうねる海の中から藤田嗣治が顔を出す。戦後日本美術界から追放され、アメリカへと向かう飛行機のタラップの上から笑顔で日本に別れを告げたあの姿で藤田嗣治が顔を出す。哀れな藤田は新天地のアメリカでも国吉康雄ら左翼画家たちの執拗な嫌がらせと妨害にあいフランスへと逃げる。彼一人に全ての重荷を背負わせ、何知らぬ顔でのうのうと生き延びてきた日本美術界に私たちもまたいる。だから私たちは藤田嗣治の顔を塗りつぶすだろう。乳白色からは程遠い薄汚れツヤのない白で、フォートリエのようにゴツゴツと。これがこの絵画の第三の罪である。だが「人質」になったのは私たちのほうなのだ。

パラパラと焼夷弾がいくつも海に降りそそぐ。海面のあちらこちらに火の手があがる。あなたは手にした霧吹き等でその炎に水をかける。逃げまどう母子の姿を幻視しながら筆を置く。

#### 第四回指示書

世界と私たちのあいだに広がる海。

世界と私たちを隔てる海。

私たちの絵画の旅も終わりをむかえる。

さあ描こう。

海の中から近衛文麿が顔を出す。詰襟の軍服には勲章がじゃらじゃらぶら下がっている。その肖像をあなたは塗りつぶす。アトリエの奥でうごめくフランシス・ベーコンのようないかがわしさで。

海の中から東条英機が顔を出す。やはり詰襟の軍服には勲章がじゃらじゃら。その肖像をあなたは塗りつぶす。

朝、目覚めたばかりのバーネット・ニューマンが一本の線を引くように。

海の中から板垣征四郎が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。ランチのあとに昼寝をするラファエロのような明快さで。

海の中から石原莞爾が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。洪水にのまれる夢をみるレオナルドの冷や汗を感じながら。

海の中から北一輝が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。長旅から帰還したジョットの疲労感を筆先にのせて。

海の中から三島由紀夫が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。泥酔したポロックのように。

海の中から永田洋子が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。デ・クーニングが女を愛するように。

海の中から樺美智子が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。ヨーゼフ・ボイスが鼻血の痛みに耐えるように。

海の中から山口二矢が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。マレーヴィッチが自分の墓石を夢想するように。

海の中から横山大観が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。戦場に出かける未来派のように。

海の中から伊藤博文が顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。太陽の光を全身に浴びるピカソの健康さで。

海の中からルース・ベネディクトが顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。藤田嗣治の乳白色で。

海の中からジョセフ・キーナンが顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。藤田嗣治の乳白色で。海の中からカーティス・ルメイが顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。藤田嗣治の乳白色で。

海の中からダグラス・マッカーサーが顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。藤田嗣治の乳白色で。

海の中からフランクリン・ルーズベルトが顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。藤田嗣治の乳白色で。

海の中からハリー・トルーマンが顔を出す。あなたはそれを塗りつぶす。藤田嗣治の乳白色で。

すべてが終わったあと、何事もなかったかのように、再び水平線から波が押し寄せ。

波の音だけが残る。